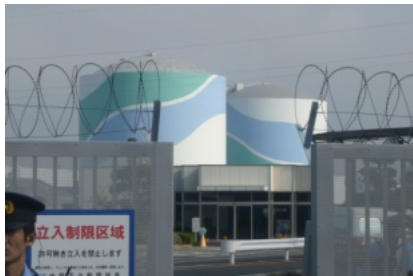


米国でNOと言われた炉を 使い続ける川内原発



川内原発ゲートのすぐ奥に原子炉が

「参考：週刊朝日2015年9月18日号」

▼三菱重工製の蒸気発生器の欠陥が原因で廃炉になったとして、米電力会社が同社に約9,300億円もの巨額賠償を請求した。

▼再稼働したばかりの川内原発の原子炉も同じメーカー製。

三菱重工は、「サンオノフレ原発

と同一仕様の蒸気発生器は他の原発に納入されていない」という。

▼だが、トラブルを起こすリスクはある。川内原発再稼働の異議申し立てを原子力規制委員会に行った山崎久隆氏はこう指摘する。

「九州電力が公表した資料によると、7年前に交換した川内原発1号機の蒸気発生器にはすでに35本の配管（伝熱細管）に穴が開きかけて施栓をしています。これが30年間使い続けている2号機の装置になると、栓をした本数は400カ所を超える。加えて古いタイプの装置は改良型に比べて配管に応力が集中しやすく、大きな地震が来たら耐えられない危険さえあるのです」

▼蒸気発生器は、熱交換効率を上げるために配管の厚みがわずか1.1ミリから1.3ミリほどしかない。常に加圧された熱水が管の中を流れているため、時間の経過によって摩耗し、穴が開くリスクも高まる。

「常時どこかに穴が開いていて、定期点検で塞ぐ」（原発エンジ

2015年9月25日

STOP原子力★関電包囲行動

<http://stop-kanden.seesaa.net/>



関電は大飯・高浜再稼働をあきらめよ 福井地裁判決を受け入れよ

ニア)といわれるほどだ。摩耗した配管が裂けて高圧水が漏れだすと、重大事故につながりかねない。

関西電力が採用しているのも川内と同じ加圧水型



1991年に事故を起こした
美浜原発

(たんぼぼ舎メルマガから転載)

加圧水型原発の最大の欠陥(アキレス腱)は蒸気発生器の細管です。

問い：関西電力などが採用している加圧水型の方が安全性が高いのでしょうか？

榎田：たしかに加圧水型では、沸騰水型で多発するひび割れは少ないのです。冷却方式が二重になっているので、二次冷却水には海水が混じりますが、原子炉の中には入りません。

しかし、加圧水型には沸騰水型とは違う欠点があり、問題はもっと深刻です。

加圧水型のアキレス腱は、蒸気発生器の細管です。原子炉の水からタービンの水に熱交換するのが蒸気発生器ですが、その細管は親指ほどの細さの金属パイプです。この細管もしばしばひび割れしますが、そのときは細管に栓をして、使用しないようにしています。

しかし、細管のひび割れが成長して破断すると、原子炉の水が抜けて大事故になります。この事故は1991年に美浜原発で起こりました。もう少しで、スリーマイル島のような炉心融解事故になるという深刻なものでした。

この事故で細管破断の怖さを知った関西電力は、その後の原発建設をやめました。加圧水型原発の方が事故は深刻なのです。

安心安全な原発などありません。どちらの事故も、炉心融解事故に発展します。

豪雨で放射能拡散

●汚染雨水、港湾の外へ流出 福島第一、大雨であふれる

記録的な豪雨の影響で、東京電力福島第一原発では、原子炉建屋近くを通る排水路から、放射性物質を含む雨水が港湾外の海へ流れ出た。排水路は堰（せき）で外洋への流出を止めているが、大量の雨が流れ込んで9月9日未明と11日未明の2回、堰からあふれた。今年4月以降で確認できたものだけで7回になる。

排水路内の水に含まれる放射性物質は、11日時点でベータ線を出すもので1リットルあたり750ベクレル。通常は数十ベクレルだが、雨が降ると周囲の放射性物質を含む土に触れた水が流れ込み、数百ベクレルに高まる。7月16日に排水路があふれた時は1100ベクレルだった。（2015.9.11朝日新聞）

チリ沖M8.3の巨大地震は他人事ではない

9月17日南米チリ沖でM8.3の地震が起き、少なくとも12人が死亡。沿岸の広範囲が津波による大きな被害を受けました。

日本でも気象庁から太平洋沿岸に津波の警戒警報が発せられました。しかし、ほんとうの警戒はこれからです。地震学者の琉球大名誉教授・木村政昭氏は「南米チリでM8.3の巨大地震が発生しました。過去の規則性から見ると、日本列島付近の巨大地震発生の可能性に注意が必要かと思われます。」と自身のHPで発表しています。

■巨大地震は太平洋を反時計回りで循環している

2014年のチリ沖の地震(M8.5)の発生と日本列島の地震活動との関係を検討したページでは

「今世紀の巨大地震が、太平洋を反時計周りに循環して発生していることが分かりました。2000年に太平洋の西側でM8.0の大地震が発生し、2001年には東側のチリ付近でM8.2の大地震が発生しました。その後の2003年と2007年には、なんと西側にもどって、北海道方面で大地震が発生したのです。そして2009年に、同じ西側のニュージーランド北方で発生したM8.1の地震後には、2010年チリ地震(M8.5)が東側で発生し、多くの犠牲者を出しました。

この地震後に、前例のように太平洋の西側で発生したのが、2011年東日本大地震(M9.0)だったのです。その後、同じ西側で2013年にM8.1の大地震が発生しました。さらに翌年の2014年、東側のチリ沖で大地震が発生しました。それが、本年2014年4月に発生したチリ地震(M8.5)なのです。」

■チリで巨大地震が起きたら平均4年後に 日本付近に地震の恐れ

「このように、巨大地震が、太平洋を反時計周りに循環して発生していることが分かります。以上のような規則性からみると、次の大地震は、太平洋の西側地域で発生する可能性が高いことも予想されます。東のチリ付近で大地震が発生したら、日本列島を含む西側は要注意だということになります。」

「これまではチリ付近の大地震後1-6年、平均4年後に日本付近の巨大地震が発生しています。すなわち、2015-2020年(平均値では2018年)頃の日本付近の地震に注意ということになりそうです。」
チリ地震から算出した地震発生予測年と国内の地震の目から算出した地震発生予測年とは、微妙な違いがあるとしながら木村政昭氏は以上のように発表されています。(以上引用終わり、小見出しは編集者責任)

東南海地震もいつ起きてもおかしくないといわれている日本で、原発の再稼働などもってのほかです。国も電力会社も自然の驚異の前に、もっと謙虚になるべきではないでしょうか。